

聖書之真理

第三十九號

壹月號

主筆 江原萬里

目次

聖書の眞理とは何ぞや 主筆

義人と認められること

ロマ書の釋述 江原萬里

挨拶及感謝

柏木教友會の成立 藤本武平二

無教會主義とは

内村聖書研究會解散の意義

眞の教會

教育勅語滿四十年と内村鑑三先生 江原萬里

先生の『不敬事件』の眞相

教育勅語と基督教

柏木通信 齋藤宗次郎

朝鮮だより 編輯餘録

朝鮮だより

○謹啓、いまだ拜眉の榮を得ませんが、我らの罪に死せられ、神に義ならしめんが爲に甦られし彼をその天父に由りて交際を許されて、靈において結ばれたる縁に、陸ながら貴下の御健闘を祈つて居ます小なるゆるされたる罪人でございます。亡國の殘氓として悲哀に滿されしもの、ゆるがぬ國の天にあるを知りしより、高き歡喜と深き感謝とにかきならされて生きて居ます。貴下の血に彼の血を受けて吐き出せる子規の鮮血は、受ける者の腦にたぎりかへります。榮光と尊貴さは彼に、感謝と歡喜とは貴下に溢れざらんやであります。毎月いさゞ高き生命に滿されつゝ、溢るゝ感謝をおさへて居りましたが、今朝は手を捕へて今この文字をかゝされて居ます。今月の贖罪と信仰増進の道とは如何に實際に富める案内でありましたらう。再讀三讀、彼を禮拜する至福にひたされました。ハレルヤであります。小さき此の感謝を主なる彼にさへけて、僕たる貴下にしたらしめられんことを。草々敬具(姜氏より)

○(前略)合本は感謝と喜びの中に拜讀して居ります。表紙から表紙まで一字一句見逃すことなしに讀んで居ります(勿論廣告まで)。そして非常なる感動を受け、又深く興味を感じます。貴誌を通じて益々神の聖名が崇められんことを心よりお祈り致します。神の言即ちキリストの福音は始めから學者や世の權威ある人には思ふがごとく、我ら罪人には生命の糧で御座います。外だけを見て内を見ることの出来ない世の學者らは何と言ふとも思想と生活誌は決してクリスチャンの前に出せないどころか、大に出さずには居られません。どうか聖名のために御盡力を惜まないで下さい。神はきつと恵んで下さるでせう。(宋氏より)

○私は此等の書信を受けて感謝と歡喜とに滿ちた。『我らの國籍は天に在り』である。主イエス・キリストに在り、彼の聖名を崇めることによりて、相互にかく深き友交に入り得ること何等の歡喜であらうか。感謝は主にこそあれ、東洋人の間の深い一致は福音を信する者の間に於て達成せられるのである。(主筆)

聖書の眞理定價 (送料共)

- 一部 二十錢
 - 半年(六部) 一圓十錢
 - 一年(十二部) 二圓十錢
 - 海外一年 二圓六十錢
 - 拂込は振替口座東京六三三七
 - 五番聖書の眞理社又は七七四
 - 二番思想と生活社宛
 - 思想と生活合本値上
 - 舊號に缺號生じ且つ合本殘部僅少のため特志家にも頒つ
 - 第一卷 二圓 送料八錢
 - 第二卷 一圓八十錢 送料六錢
 - 第三卷 二圓三十錢 送料八錢
- 昭和五年十二月二十日 印刷納本
昭和六年一月一日發行
- 神奈川縣鎌倉町扇ヶ谷三四三
編輯印刷 兼發行人 江原萬里
東京市外濠谷町向山九七
發行所 聖書之眞理社
名古屋市中區流川町一八
印刷所 一粒社印刷所
東京市外柏木九四六
發賣所 獨立堂書房
振替東京一九四六八番
向山堂書房及一粒社書店
の發賣所は從前の通

聖書之眞理

第三十九號

昭和六年一月一日發行

聖書の眞理とは何ぞや 主筆

本號以降、本誌は從來の題號「思想と生活」を改め、之に代ふるに「聖書の眞理」を以つてする。その敢て改題をなす所以のものは、本誌が主張し來つた本領を變更したためでなく、反つて今一層之を明白ならしめんがためである。即ち、表題をして内容に最も適應せしめんとするまでである。本誌の使命は世界最大の書である聖書のうちに啓示せられた神と人とに關する大眞理を鮮明にし、之を現代日本人の思想と生活の基準たらしめんとするに在る。今改題に際して本誌の唱道し來つた主張の主要を聲明せんと欲する。

一 信仰の自由獨立

本誌は信仰の自由と各人の獨立を主張する。信仰の自由とは何人も自己の良心に従つて神を信することの自由を言ひ、各人の獨立とは直接神に絶對の信賴服従をなすためには信仰上如何なる制度、如何なる組織、如何なる權威にも依屬しないことを意味する。我等は自己の良心に倚らず、只他人の説に盲從して神を信せず、自ら以て眞理なりと確信するところに據つて立つべきことを主張する者である。

かるが故に、我等は教會に入り其の信條に従はずば、法王、祭司、監督の教權に服せずば、又宣教師、牧師、長老、執事等の誘導に依賴せずば、神と自己との關係を義しく維持し得ないものと考へない。何人も單獨に且つ自由に、人に依賴せず、人より獨立して、各々直接に神と偕に歩み得るも

の、又然かすべきものなる事を主張するのである。

されば我等は我等の信仰を他人に強ひない。何人をも強いて我等の宗旨に引入れやうとしない。

その信仰の自由を尊重し、その人格を尊敬する者である。此の故に教會人に對して教會より出でよと勧めない。現存の教會を否認もしない。教會に入ると入らざるは人の自由である。かく何人に對してもその信仰の自由と獨立とを尊重する我等は又何人に對しても我等の信仰の自由と獨立とを尊重せられんことを主張する者である。我等の行動を干渉せざらんことを要求する者である。こゝに我等の無教會主義の本領がある。

かく各個人の自由獨立の確保を主張する我等は人々の眞の幸福、社會の眞の進歩發達は社會的制度組織は勿論他人の人格的感化力にも因らないことを認める者である。それ故我等は社會制度の變革、環境の改良に由つて、人々を其の苦惱より救

ひ、社會の病患を除去せんとしな。又我等は他人のお情けによつて衣食する寄生虫を憎む。働かざれば食ふべからずである。自由獨立人は當に己が天分を盡くして生くべきである。信仰の自由と各人の獨立との確保を主張する我等は、經濟上の獨立をも人々に勧告する者である。

社會の改革改良は我等の本領にあらず、各人が營に信仰のみならず、生活と思想との全般に亘り自由獨立人たらんこと、是我等の主張であつて、斯の如き自由獨立人、即ち政府、教會、其の他何人にも倚らず、自己の良心に於て直接神に頼つて立つところの者を我等の同志と喚ぶ。我等の同志は須く相互にその人格を尊重し、互に敬愛せんことを勧めるのである。

二 純福音の信奉

然れども我等の自由獨立は、それが單に自由な

るが故に、又獨立なるが故に、之を尊重するのではない。無教會主義は無教會主義なるが故に之を把持しない。若し之を其の主義の故に、それ自身に絶對の價値を置かば、結局現存諸教會諸宗派に相對して別の一派を樹立する者となる。此の事は我等の堪ゆるところではない。我等が如何なる教會、如何なる人にも隷屬しないと云ふことは、唯神にのみ絶對に信賴することの謂である。

更に之を明確に述べば、唯キリスト・イエスを信ずる信仰によつて生きんとすることである。吾人に人に依頼し隷屬せざるのみか、自己の力、自己の品性にも倚らない。唯、神の絶對的自由なる恩恵により、我等の主イエス・キリストの死を我等の贖罪のための死とし、此の死より復活し給ふたキリストに在つて生きるのである。彼を信じて我等は過去に死し、新に生きたる者なるを感ずる。我等は眞實に己が罪を憎む者となり得、又始めて

良心に於て神に義人と看做されたことを感ずるに至る。神に對して平和を得、神の恩恵に歡喜するを得る。此の外に救あることなしである。

されば我等は自ら義人たらしめない。唯主イエス・キリストを仰ぎて彼を我等の義とする。我等自ら聖者たらしめない。キリストに在る神の子たるの生命を受けんとして彼を我等の聖とする。我等は自ら靈魂の永生と肉體の不朽とを造り得ない。やがてキリストに贖罪あがなはれ神に義とせられたる者のうちに顯現さるべき主イエス・キリストの榮光を待ち望む。我等の救は我等自ら稼ぎて之を得るにあらず、神の國は我等努力して之を建設するにあらず、キリスト之を我等の中に成就し給ふことを確信する者である。

我等は知る、我等は皆神に反き、神より離れたる罪人にして、生來の儘なる我等は神を知らず、自らを義とする力なき事を。然るを「父の懷裡に

います獨子の神』キリスト地に降り、我等が自ら知る以上に深く我等の靈魂の奥底に尋ね入り、我等に代つて我等の罪を擔ひ、十字架上に死し給ひて彼を信する凡ての者に罪の赦し、神の和睦やはらぎを得せさ、我等をして眞の神の如何なる方なるかを知らしめ、今復活して我等を代表して天に在り我等の爲に執成し給ふキリストの在し給ふ事を知る。

我等は更に知る。彼に信賴し我等の一生を彼に託すれば託する程、彼は聖靈を以て我等を護り導き、神を我等の父として拜するを得せしめ給ふことを。是我等の據つて立つ處の純福音である。かゝる大なる救主に信賴する事によりて、我等は此の世の如何なる權威にも、如何なる人にも、如何なる制度にも依頼せず、隷屬せず、天地萬物の創造主を父として眞に自由獨立人たり得るのである。

三 靈 交

されば我等はパウロと共に證しして言ふ。『我キリストと偕に十字架に釘けられたり。最早我生くるにあらず、キリスト我が内に生くるなり。今われ肉體に在りて生くるは我を愛して我がために己が身を捨て給ひし神の子を信するに由りて生くなり』と（ガラテヤ書二章二十節）。

キリストの我等を愛し給ふことの深さは世の常の愛の比にあらず、己を十字架に釘くるまで憎み迫害する我等の罪を贖罪おがなほんがため、自ら我等に代りてその呪詛を受け、我等の死すべき死を十字架上に死し給ふて、神の恩恵により、我等は既に彼と偕に十字架に死したる者とせられたのである。是は我等の意志に毛頭もよらない。我等の未だ嘗て願ひだにしなかつた事である。『神のおれを愛する者のために備へし事は、眼いまだ見ず、耳いまだ聞かず、人の心いまだ思はざりし所なり』（コリント前書二章九節）である。

されば我等が今生くる生命はキリストのもの、キリスト我等を愛し、之を罪と死との詛より救出し、之を潔め、之に榮光を得させんために今あるが如くあらしめ給ふ生命である。我等は實にかゝる者である。我等は我等にして我等ではない。新にキリストにより創造せられたる者である。彼を信じ、彼に在りて生くること益々深くして、益々彼は今尙生きて働き、聖靈を以て父なる神を示し、キリストの恩恵、父なる神の愛、聖靈の交感、常に我等と偕に在るを感するのである。我等彼に在りて一の神の愛、一つの救主の恩恵、一つの聖靈の交感を受くる者いかで相互に一つたらざるを得やうか。彼の愛により生くるを得たる我等いかで他を愛さざるを得やうか。若し夫れ憎悪嫉妬のあらんか、これキリストの御靈なき者である。我等は彼を信する信仰により、神に義人と看做され、又彼の愛に満ちて兄弟を愛せずば已まない。互に信

仰を勵まし、患難を慰め、乏しきを賑はし、有無相通じ、各自の業を援け、彼我思を一つにす。我等は何物をも所有せず、我等の有する財物は神のもの、又兄弟のもの、我等は只之を善良なる管理者の注意を以て保管處理する者となる。

此の至純の愛の交りはキリストに在りて聖靈により父なる神を拜することを得、キリストの愛に勵まされて己の敵すら愛する自由獨立人の間に於てのみ完全に實現するものである。

以上を更に簡述せば、

- 一、我等は何者にもたよらない(無教會主義)。
- 二、我等は自己にも倚らず、唯キリストにたよる(純福音主義)。

- 三、我等はキリストが我等を愛し給ふやうに何人をも然り敵をも愛せんとする(聖一體主義)。

是れ本誌の主張するところであつて、我等が之を

聖書の眞理なりと確信するところのものである。此の大眞理が我等の生活の原理となり、思想の根柢となる時、個人は活き、社會は革り、家は興り、國は榮え、地は平和となる。我等の本領とするところ、その據つて立つところの聖書の眞理は宇宙と偕に無窮に、天地萬物と共に悠久である。本誌はかゝる大眞理を傳ふる聖書を各人の書たらしめ、我國の礎となさんために左のことを企てるのである。

一、聖書の眞理を鮮明すること。

二、人々に聖書の研究を勧め、各地にその研究會の設立を促すこと。

三、各地に於ける自由獨立、自己にも倚らず、唯キリストを信する信仰によつて立つところの人々の間に靈交を深めんとすること。

之れ本誌の使命とするところである。今改題に當り之を聲明する者である。

義人と認められること

過去に犯した罪惡は一切忘れ去られて少しの惡をも爲さざりし者と認められ、又人間として爲すべき義しき事は悉く成し遂げた者と看做される事が神に對して義とせられた事である。世にこんな事がありやう筈がない。誰か善く他人をかやうに見ることが出來やう。又何人が善く自ら過去に一點の疚ましき事なく、凡ての善は悉く之を成遂げたと自覺する者があらうか。不可能である。然かも基督者は各自神によつてかゝる者と看做され居る事を心に感ずる者である。それ故に相互に罪を審判かず、神の義人として尊敬し合ふのである。

我等かく神に義とせられた事を感じるは、キリストの十字架を仰ぎ見てである。彼の死によりて義なる神は此の恩恵と平安とを與へ給ふ。而して我等一度神に義人とせられて、早晚眞實の義人にせらる。然り唯キリストに在りて生きさへすれば。

ロマ書の釋述

江 原 萬 里

挨拶及感謝 (一) 挨拶

キリスト・イエスの僕、召されて使徒となり神の福音のため選び別たれたる

パウロ

書を

ロマに在りて

神に愛せられ、召されて聖徒となりたる

凡ての者に贈る

自己紹介

私は萬民の最大の福祉に係はる神の福音を異邦人に宣傳へる權能と職務とを有する者である。爰にロマ帝國の首府に在り、神に愛せられ、神に召されて聖徒即ち神の民とせられた諸君に一書を呈

せんと欲する。

私は未だ貴地を訪問せず、貴地に在る聖なる集團を建設するの名譽を有しない。されど私の主イエス・キリストより與へられた異邦人に福音宣傳の權能と職務とに據つて、貴地の集に多大の關心事を有する者である。今此の書を贈るに當り、あなた方の中未だ私を見ず、私を知らない方も多いと思ふ故、最初に稍詳細に私の何人であるかを紹介し度く思ふ。

何よりも先に申上げねばならないことは、私は1 キリスト・イエスの僕であると云ふ事である。嘗て古の預言者たちが『神の僕』であつて、エホバの聖意を畏れかしこみ、一身を献げてその命を遵奉したやうに、私も亦我らの主イエス・キリストの僕であり、その命の儘水火をも辭せぬ奴隸の如き者である。されど私は彼に絶対に隸屬服従するどころの奴僕となつて、始めて眞に人間らしい

自由を得た者である。私は此の世の權力に使役せられない。黄金の前に低頭しない。罪と死との束縛を脱することを得た。私はかゝる奴僕である。

されど私とキリストとの關係は只單に彼の奴僕であること云ふだけでは盡くしない。私は彼より重大なる職務を受けた者である。即ち彼に召されて使徒となり、他の十二使徒と同様キリストの全權大使である。

何のための全權大使であるか。それは神の福音を宣傳ふることの全權を託せられた者である。神がその創造し、維持し、攝理し、之を完美し給ふ天地萬物と、罪の墮落の悲痛に悩み救を待てる我らに對して、神が預じめ定め給ふた御救に關はる永遠の計畫が今顯現した、その嘉信宣傳が私の任務である。實に重大なる任務である。私は此の任務のために召され、此の神の福音のために選別別たれたる者である。宛かも神は古の預言者エレミ

ヤを召し給ふて之に告ぐるに『われ汝を腹につくらざりし先に汝を知り、汝が胎を出でざりし先に汝を聖め、汝を立てて萬國の預言者となせり』(エレミヤ書一・五)と言ひ給ひしやうに、同一の神は『母の胎を出でしより我を選別ち、その恩恵をもて召し給ひ』御子を我が内に顯はして其の福音を異邦人に宣傳へしむるを可し給ふたのである。

(ガラテヤ書一・一五及一六)。

されば此の聖召、此の聖別、之により使徒とせられ、福音宣傳の任務を受けずば、私は決して自ら立つて此の福音を宣傳へなかつたであらう。私は主から此の重大なる責任を負はされ、神の絶大なる御能力能力に動かされて、已むに已まれず奮起したのである。されば私がキリストの使徒となつたのは決して『人由りにあらず、人に由らず』(ガラテヤ書一・一)、又自分自身の發意に出でない。それは已むを得ないのである。『われ福音を宣傳ふることも

誇るべき所なし、已を得ざるなり、もし福音を宣傳へずば我は禍害なるかな』(コリント前書九・一六)。我かくの如くば之れ神に反き、身の破滅である。

ロマの受信者

かく私は異邦人に福音宣傳の權能と義務とを有する故に、⁷ われ書をロマに在りて神に愛せられ、召されて聖徒となりたる凡ての者に贈るのである。

諸君はユダヤ人と異邦人との區別なく、皆特別に神に愛せられ、世の多くの人々のうちから神に召されて聖徒とせられた者である。丁度イスラエルの民が今まで全人類中より特に選ばれたて聖なる神の民とせられて居たやうに、諸君は神の特選の民として聖別せられ、聖徒となつた人々である。

何故に然るか。それは諸君は他の人々に優りて潔く正しく特別の能力を有して居られたからではない。只神の絶對的自由なる恩恵により、神に愛せられ、預じめ神に知られ、それ故神の福音の宣

傳へられるや召されて心から之を聽從するに至つたからである。かくて諸君は主イエス・キリストに在る神の御救の能力を経験し、自ら神に愛せられ、召されて神の聖徒となつた事を感ずるに至つたのである。自ら潔くあらず正しくあらずして、然かも諸君は聖なる神の聖なる御性質に接續する者となつたのである。諸君を聖徒又は神の選民族と云ふはこの謂である。それは諸君の個人々々を指して云ふのではない。聖靈により一體とせられた諸君のうちに在る無形の團體を指すのである。私は今此等の聖徒に對して此の書を贈る。

兩者を結ぶ要、福音の中心

かくの如く神に召されて私は福音の使徒となり諸君はこの福音を聽從して神の選民となつた。まことに此の福音は神が預じめ知り給へる者を神の民として招き之に福祉を與へ給はんための神の召喚狀である。さらば福音とは如何なるものである

か。此の書翰は之を説こうとするのであるが、今爰に福音の中心を簡單に申述べて置こう。

2 この福音は神その預言者たちにより、聖書の中に預じめ御子に就きて約し給ひしものなり。私
が宣傳の使徒となり、諸君が之を聽從して聖徒となつたこの福音は、從來神に於て何等の豫告なきものにあらず、況や私の單なる一場の獨創的思付きでない。之は過去數千年、神自らイスラエルの民族の祖アブラハム、之をエヂプトから救出したモーセ、中興の王ダビデ、其の他預言者たちに語り、約束し給ふた事柄であり、舊約聖書を読む者は早晚その實現を期待して居たことの實現の嘉信である。何ぞや、御子の出現とその聖業即ち之れ。福音とは此の事を言ふ。萬民の最大の祝福の基礎は彼の出現とその聖業に由つて既に成就し、今後我らの眼前に顯はれ來るのである。罪の呪詛と死の暗黒に彷徨ふ者彼を仰ぎ見て父なる神を知り、

彼に信賴して神の榮光に與る。福音とは御子に關するものである。彼なくして福音はない。神は御子を通じて我らに愛を示し給ふのである。

さらば神の子は如何なる方かと云ふに、彼の肉體的及靈的兩方面に顯著なる特色がある。その肉體的方面よりせば、彼はユダヤ人の王、メシヤとして生れ給ひ、その民族の理想の成就者であり給ふ。即ち、御子は肉によればダビデの裔すまより生れ給ふたことである。此の事實は舊約聖書の預言成就より見て甚だ重要であり、マタイ、ルカの福音書は系圖を掲げて之を證しする。但し主御自身は己れがダビデの子たることは救主としてさ程重要とは思ひ給はなかつた。それ故自ら之を使用し給はず、又人のかく彼を喚ぶをも餘り好み給はず、反つて或る學者に對して言ひ給ふた。

なにゆゑ學者らはキリストをダビデの子と云ふか。ダビデ聖靈に感じて……自ら彼を主と云ふ。

争でその子ならんや（マルコ二・三六）と。

彼はダビデ王統の裔であり、ダビデ王の位に即き給ふ方であつたけれども、それは彼にはいと小さきことであつた。何となれば彼の靈的方面に於いてそれよりも更に偉大なる事實があつたからである。

何ぞや、⁴ 潔き靈によれば、死人の復活により大能をもて神の子と定められ給へり、之である。

彼のうちに在る靈性、大天使もその榮光の眩しさに顔を蔽ふて俯れ伏す聖潔の光輝よりせば、彼の死後の復活によつて何人の眼にも明瞭に彼の神の子たる事が明かとなつたのである。勿論彼は復活に由つて始めて神性を獲得し給ふたのではない。世の創造の前より永遠に神であり給ひ、暫らく肉體を纏ふて時間のうちに入り、人を救ふため地上三十餘年の苦難の聖生涯中にもそのうちに神性は宿つた。されど彼が我らの罪を一身に擔ふて、我

らに代りて死し、死して榮光のうちに復活し給ひしことにより、『終りのアダム』なる彼は自ら神の子たるのみならず、彼を信する者に己に在る神の子たる『生命を與ふる靈となり』終りのラツバ鳴らん時みな急ち瞬間に化し（コリント前書一五章、彼に在りて死せる死人も亦悉く復活せしめらるゝの希望明白となつたのである。

此の『死人の復活』により何人にも人の子たり給ふ彼は眞實神の子であり給ふ事が明白となつたのである。彼は此の復活により神によりかく『神の子と定められ給ふたのである。それは内なる神性が外に明白に顯現したことを言ふ。そしてそれは彼自ら之を成し給ふたのではない。神がその『大能をもて』かくなし給ふたのである。我ら彼を仰ぎ見て神を知り、神の御救の御手のうちに在ることを感ずるのは、實に神の大能、神の大なる奇蹟と云はねばならない。

されば私の宣傳するところの神の福音の中心は此の『御子』である。御子とはそも誰ぞ、之れ即ち我らの主イエス・キリストなり。實に『我らの主』『イエス』『キリスト』と三語を相連ねて以て私の宣傳ふる神の福音を要約し得る。地上三十餘年の苦難の聖生涯を送つて、我らの罪のために十字架に死し給ふたナザレの『イエス』は、『キリスト』即ち我らの救主であり、我ら彼に信賴し、彼に在り彼と偕に生きて眞に神と義しき者とせられ、遂に天地萬物を支配し得るに至る。我らの救主なる彼は今や死より復活し給うて榮光の裡に在り、我らの『主』たり給ふ。主とは天地萬物と全人類とを支配し給ひ、その命運を掌る主權者の謂である。『諸般の名にまさる名を賜ひ……天に在るもの、地に在るもの、地の下にあるもの、悉くイエスの名によりて膝を屈め、且つもろもろの舌の「イエス・キリストは主なり」と言ひあらはすこと

である（ヘリヒ書二・九一―一二）。それ故主とは神御自身でなければならぬ。

思ひ見よ、彼の短き地上の御生涯、殊に三年に滿つた満たぬその傳道、そのため人に悔られ棄てられし屈辱と慘ましき十字架の死後、未だ二三十年を経ずして、彼と食卓を共にせる者今彼を仰ぎて天地萬物と全人類の支配者、その命運を掌中に握り給ふ主として崇め、我らの靈魂と肉體との救主として信賴するに至つた事を。之れ神の大能にあらずして何であるか。私の宣傳へ、諸君の聞きて信じたる福音とは此の御子に關するものである。

恩恵と使徒の職

そして、我らその御名のためにもろもろの國人を信仰に従順ならしめんとて、彼より恩恵と使徒の職とを受けたり、恩恵とは神に對して何等誇るべき義なく、反つて彼に叛きその敵となりて救主を迫害し、自ら滅ぶる以外に道なき者が、神に義

人と看做され、聖潔を得、又種々の靈的賜物を受くるに至り、將來益々祝福さるべき至大の恩恵を云ふのである。之を受けた者は當に私のみに限らない。諸君も亦そうである。

只私はキリストより此の信者一般の受くる恩恵以外に、同時に使徒の職をも併せ受けた者である。それは當にユダヤ人に對するのみでなく、全世界の人々にまで此の恩恵に與らしめんため、換言せば神に愛せられ、神に召され、此の救に與らんための信仰より出づる從順を得んがために、地の極はたにまで神の福音を宣傳ふる使徒の職を受けた者である。

私の使徒としての義務はかやうにもろもろの國人に對する福音宣傳である。彼らをキリストに在る神の救に與らしめんために神よりの召喚狀なる福音の使者である。そして汝等もその中にありてイエス・キリストの有もならん爲に召されたるなり。

それ故あなた方に對しても此の『信仰に從順』その心からなるキリストに對する信從を得て、かくて『その御名のために』即ち彼の御名の榮光の高く擧らんために、今も『われ書をロマに在りて神に愛せられ、召されて聖徒となれる凡ての者に贈る』次第である。

願はくは我らの父なる神および主イエス・キリストより賜ふ恩恵と平安と汝らに在らんことを。

我らに何の善きものあらず、聖前に惡を重ね、滅亡の子たる者なるに拘はらず、神の絶對自由、何物にも拘束せられ給はざるその至大の愛、それよりする測り知られざる恩恵、而して之を受け彼と和睦やはら泰ることを得て心に生ずる言ひ盡し難き我らの平安、此の恩恵と平安と今あなた方一同に在らんことを祈る。在天の父なる神御自ら、及び我らの主イエス・キリスト、聖靈に由りて之をあなた方に與へ給はんことを切に祈り奉る。

柏木教友會の成立

藤 本 武 平 二

内村聖書研究會は去る昭和五年四月六日解散せられた。五六百名の會員は夫々その往く所を決めなければならなかつた、その中の或者は獨立して傳道を始めた、ある者は教會へ復歸した、又或者は相寄つて祈禱會を始めた。柏木教友會といふのはその祈禱會の一つであつて、小數の有志が去る七月内村家より今井館を借りて毎日曜午前十時から集會を始めたのである。日本の一地方柏木に於ける教友の集りこの意味を以て柏木教友會と呼ぶ事となつたのである。

勿論柏木教友會は教會でない、眞の教會たらん事を欲する。柏木今井館に於て集會するからとて決して内村聖書研究會を繼ぐのではない、内村先生の説かれた純福音を繼ぐ者たらん事を欲する。

勿論吾々は恩師の唱へられた單純な十字架の信仰を占有するものとは決して思はない、信仰すらも愛に在し給ふ神が特に賜ひしものとして感謝せん事を欲する。キリストの名によつて同信の友が集ひしもの、一つ是れ柏木教友會である。而して我等は道德の優れたるによるにあらず、思想の深遠なるによるにあらず、信仰の熱心なるによるにあらず、我等に何の救はるべき權利も資格もなきに、神は憐れみを以て心碎けし我等を救ひ給ふのであると信するのみである。故に我等は教會員たる事、洗禮を受くる事、傳道事業、慈善事業、然り無教會主義者たる事によつて天國に入るの資格を獲得せんごしない。神は恩恵によつて罪人をも悪人をも忘恩者をも救ひ給ふご知るが故に、我等も亦キリストの十字架の贖により必ずその憐れみに預り得るものである事を信じて、心には常に平和と感謝と歡喜とが溢れるのである（路加六章三十五節）。

無教會主義とは

藤 本 武 平 二

内村先生の『無教會主義』位簡單なやうであつて誤解されやすい主張はないであらう。

先生はその無教會主義に於て、信者が教會と名づくる建物に集會する事を拒否されたのではない、又牧師長老と稱する役員を有する教會に集會する事を拒まれたのでもない。無教會主義は斯かる建物とか場所とか役員とかいふやうな外形に對して唱へられたのではなく、多くの現代教會が屢々有する教會的精神、即ち洗禮を受くる事、教會員となる事、聖餐式に列する事、傳道事業、教勢擴張等によらざれば救はれないこの精神、換言すれば人の救はるゝは信仰によらず行爲によるものこの精神、更に換言すれば人の救はるゝは神の賜ふ恩恵によるにあらず律法或は聖典によるこの精神、

斯かる誤れる教會的精神に對して無教會主義は稱へられたのである。

故に無教會主義は常に多くの現代教會に對してのみ叫ばれたものではない、よし教會と名づくる建物はなくとも、よし又牧師長老洗禮聖餐式等はなくとも、然り、よし無教會主義を標榜せる信徒の集會であつても、若し教會的精神を以てせるものであるなら、之に對して無教會主義は主張さるゝのである。

無教會主義は教會精神に反對する、是れ勿論教會を惡みてではない、又教會を壞たんとしてでもない、唯キリストの教會が如何なるものであるかを指示し、今の教會精神に墮せる教會を眞の教會に歸らしめんと欲するのみである。

故に無教會といつたからとて、教會と名の付くものは如何なる教會にても悉く之を拒否しようといふのではない。眞の教會の出現を希望して誤れ

る教會精神を拒否せんとするのである。然るに世には往々にして所謂教會のみならず眞のキリストの教會をも悉く否定するものがある。是れ恰も無政府主義者が如何なる政府をも否定せんとすると其軌を一つにせるものであつて、破壊をのみ目的とせるものである。眞の無教會主義は決して破壊を目的とするものでない、建設のために必要なる破壊を行ふのみ。眞の教會の成就せんがために無教會主義主張の必要を見たのである（馬太五・十七、十八）。

内村先生は無教會主義を先生の獨創的意見として提唱されなかつた。既に舊約時代エレミヤ之を唱へ、イエス・キリストは神の子として世に降り之を唱へ給うた。教會主義者たるパリサイ人と祭司等はキリストの最も憎み給ふ所であつた。神は更にパウロをして、又ルーテルをして無教會主義を絶叫せしめ給うた。故に内村先生は決して無教

會主義の創始者ではなかつた。キリスト彼自身が之を創め給ひ、内村先生は唯單にキリストに追從されたに過ぎない。

内村先生が無教會主義を唱へられたのは教會に容れられなかつた報復であるといふ者ありとせば是れ全く無教會主義の起原を知らざる者の言である。

實に無教會主義は人の叫びでなく、神の聲である。行爲によらず信仰により恩惠的に救はるゝの喜びの音づれを萬國の民に徹底せしめんために、神が之を叫ばしめ給うたのである。神の教會がいつの間にか所謂教會と化せしが故に之に反對して現はれたのである。従つて無教會主義はその對照物たる教會主義が世より其姿を歿すると共に自然消滅に歸すべきものである。故に眞の無教會主義者は一日も速かに無教會主義を唱ふる必要なに至らん事を祈りつゝあるのである。

無教會主義は神の建て給ふ教會を否認するものでない。律法的救済を説く教會が眞の福音教會に非らざる事を指摘するに過ぎない、決して無教會主義自體に生きんとするものでない。故に無教會主義者の祈り求むるところは無教會主義そのものでなくして眞の教會である、人の建つる教會に非らず神の建て給ふ教會、バリサイ主義を語らず恩恵の説かるゝ教會、律法を語らず福音の説かるゝ教會、行爲を語らず信仰の説かるゝ教會、道德を語らず十字架の救の説かるゝ教會是である。

内村聖書研究會解散の意義

藤 本 武 平 二

内村聖書研究會は勿論教會でなかつた。

内村聖書研究會はその名の示す如く内村先生主宰の聖書研究會であつて所謂教會ではなかつた。

故に先生は生前繰り返し宣言された『内村聖書研

究會は僕が死んだら解散だ』と。

昭和五年三月廿八日先生召され、四月六日、嗣子祐之博士は先生夫人と研究會の委嘱を受けた人との完全なる意見の一致によつて、内村聖書研究會の解散式を舉げられた、此日長年續いた内村先生責任の聖書研究會は全く解散された。先生の遺言は斯くして遂行せられ、今や内村先生の責任に於ける何物も残らない。

然し内村聖書研究會は眞の教會であつた、神の教會であつた、キリストの御名によつて同信の友相集ひし教會であつた、然り神が内村先生を用ひて始め給ひしキリストの教會であつた。故に神の屬であつて、内村先生個人のものではなかつた。

故に内村先生は考へられた、自分を通して始め給ひし永遠の神の御手はいつ迄も休め給はないであらう。必らず宇宙の完成される日まで神はその御業を續け給ふであらうと。この事を思つて先生は

昭和五年一月十七日弟子を病床によんで集會を今後も繼續するやうにと繰り返された、更に又三月廿五日早曉いよ／＼最後の近きを豫感された時、雜誌と集會とを今後も繼續するやうにと委囑された、然かもこの事は先生が豫め認めおかれた遺言書にも明記されてあつた。

解散せよと繰り返された先生は又繼續せよと繰り返された。或は言ふであらう、先生は病床に就かるゝやその考も病的となられた、故に繼續せよとの遺言は採るに足らずと。私は絶対に然か信する事ができない、先生は召さるゝ九時間前に此の世に於ける最終の言葉として大なる言を發せられたではないか、福音と天國と和らぎと罪の赦しを以て先生の心は一杯であつた、方に先生の心は聖なる思に躍動して居た、些の精神異状も認められなかつた。故に私は解散せよといはれた先生が何の錯誤なしに繼續せよと語られたものと信する。

先生は聖書研究會に於て、先生自身を會員の一人と見做し、會員名簿に年齢順によりてその名を記入された。そして會をして純然たる平信徒の集會とせられた。先生は自らを會員とキリストとの中間に置く事を極力避けんと努め屢々注意を與へられた、曰く、先生を通して間接にキリストに結ぶのではない、會員各自が直接キリストに結び、キリストに於て先生と結び又會員相互が相結び一つになるのであると。かゝる性質の會であつたからこそ、研究會はキリストの中に在ます眞の教會であつたのである。従つて先生の責任は先生の昇天と共に解かるゝも、各會員のキリストによる結びは神が恩恵を以て特に賜ひしものなるが故人之を解く事ができない。神の始め給ひし御業は人之を擅に斷つ事ができない、又斷たんとするも到底人の斷ち得るものではない、若し斷ち得るやうなものであるならば、それは神の御業といふ事は

出来ない。誠に先生は、全人類の救済と宇宙の完成とを企圖し給ふ神の聖なる心を心として此の言葉を發せられたのである。

故に先生の繼續せよこの言葉は、聖書之研究誌及び内村聖書研究會そのもの、上に限定されたものと見ることは出来ない。繼續せよとは、神が先生に示し給ひし純福音即ち罪を悔いて十字架上のキリストを仰ぎ見る事により、神は恩恵を以て吾等の罪を許し永遠の生命を與へ給ふこの福音を全人類に普く傳へよこの意味に解すべきである。故に繼續せよこの言葉は先生の教へ子全體に對して語られたものである。教會に復歸して教會の爲に盡くす者も、獨立傳道する者も、説教會祈禱會を開く者も、すべてキリストの御名のためにつくす者は是れ恩師の繼續せよこの遺言を守る者といふべきである。かく解して先生の言葉に何の矛盾をも發見する事ができない。故に解散せよとは單に

内村聖書研究會に於ける先生の責任に對してのみ語られたものであつて、決して神が先生を通して始め給ひし御業をも解散せよこの意ではあり得ないのである。柏木教友會は神の此の御業の繼續されんがために集められた者の一つである。

眞の教會

藤本武平二

ある時キリストは言はれた『二三人わが名によりて集まれる所には我もその中に在るなり』と(馬太傳十八章二十節)。これこそキリストが眞の教會とは本質的にどんな集會であるかを示された御言葉と見るべきである。

神は愛で在り給ふ、而して愛は必ず對象を要する、故に神の愛を信するクリスチャンは一人であり得ないのである。茲に若し片田舎に孤獨生活する信者ありとせんか、若し近村に同信の者ありと

聞かば、直ちに尋ね行きて、未知の二人三人が十年知己のやうに信仰を語り天國を談じ、共に祈らないでゐられようか。かうして二人以上の信者がキリストの名によつて集まる時、そこにはキリストも在まし給ふといはれたのであるから、この二人以上の主の名によつて集まりし會こそは眞の教會といふべきである。平信徒二人だけでも教會は立派に成立する、必ずしも牧師傳道師長老執事を要しない。然しキリストは一人だに滅ぶる事を好み給はない、萬國の民を悉く救はんこの愛に燃え給ふ、故に一人でも多く救はんとし給ふ、十人可なり、百人可なり、全人類十八億萬人主の名によつて集まるに至らば更に可なりである。

キリストは信者の集會する場所に就て何等の制限をも設け給はなかつた。小人數の時には家庭に集まるも差支ないのである。ブリスキラミアクラの家に信者の集まつてゐるのをパウロは教會と呼

んだ（羅馬書十六章三十五節）。又ビレモンの家庭集會も教會と呼んだ（ビレモン書二節）。故に特別な教會堂を持つ事は勿論教會たるの必要條件ではない。野原でも森林でも深山でもよい、昔ロマの信者達が迫害を避けて秘かに集うたといふ墓場の穴倉カウコムの中でもよい。青年會館でも、大手町衛生會館でも、今井館でも、日本青年館でも、ビルデングでも、或は又カトリック教會堂の中でもどこでもよいのである。或は又一定の集會場なくして毎日曜各所を轉々して迫害を避けたる英國基督教徒のやうでもよろしい。

或は又工場の一隅でも、監獄の中でも、下宿屋の二階でもよい。パイプオルガンはなくとも小川の囁きと小鳥の歌があれば澤山である。コーラスはなくともハンマーの音とモーターの唸りとで結構である。ダウキンチニケルアンゼロの名書はなくとも蒼空に輝く燦然たる星があればよい。ス

テイインドグラスはなくとも窓外に森と山と霞があれば澤山である。バチカン宮殿でなくとも賤が伏屋で結構である。天も地も、山も川も、森も林も是れ皆神の造り給ひしものにして神の屬もである、聖なるものである、何處に集會することも神の御名のためである、何の制限をか設け給はん。

キリストは『わが名によつて』と仰せられた。キリストの御名のため集まるのである。故に法王監督牧師の名の爲めに集まるのでない、英雄崇拜の爲めでもない、社會事業の爲めでもない、知識獲得の爲めでもない、教理、信條、主張、音樂等の爲めでもない。何の爲めでもない、唯キリストの御名の爲めである。

『われもその中に在るなり』とキリストは語られた、何と嬉しい事ではないか、今日われ等同信の友がキリストの御名によつて集まつて居る時そこに主が居て下さるといふのである。大衆運動を

試みるの必要はない、二三人でもキリストと共に在るの幸福に預り得るのである。キリストの共に在ます集まり、是れキリストの教會である。この教會こそはキリストの聖なる花嫁として最も相應しくはないだらうか。かくして『我等もはや旅人また寄寓人にあらず聖徒と同じ國人また神の家族』（エペソ書二章十六―十九節）となるのである、昨日迄は罪に死すべかりし我等、今日はキリストの十字架の贖により聖徒の内に加へらる、その聖徒の集ひこそは眞の聖なる教會にあらずして何であらう。二三人でもよい、加州の野にある友よ、同志相語らひて森蔭に眞の教會を作れ、北海の果てなる友よ、主にある友と家庭に眞の教會を作れ、全地に在る兄弟よ十八億萬の友よ、悉くがキリストの御名によつて一つとなり五大州を家とする眞の教會を造れ。この時キリストを頭とし全人類を會員とする眞の教會は實現するのであらう。

教育勅語滿四十年記念

内村鑑三先生

江原萬里

一、先生の『不敬事件』の真相

昭和五年十月三十日は明治大帝の教育勅語發布滿四十年に相當し、全國二萬五千餘の小學校、數千の各種學校、各市各町各村各區に於て之を捧讀せられ、此の日を記念したのである。そして帝都に於ては、帝國大學の大講堂に於て文部省主催の下に盛大なる式典が舉行せられ、正面に明治大帝の御眞影を奉掲し、菊花董り、三萬燭光の電燈燦然として輝くところ、文部大臣教育勅語を捧讀し、

内閣總理大臣以下千餘名の會衆は一整に起立して之を謹聽したのであつた。

傳へられるところによれば、教育勅語發布の事

情は、當時西洋の文物が盛に輸入せられ、英の功利説、佛の自由民權説、獨の官憲萬能説等入り亂れて盛に唱導せられ、之に對して我國の國粹保存を主張する者もあり、諸説紛々、混亂を更に混亂せしめたやうな状態に在り、學校に於て授ける徳教の方針に關しても一定の標準なく、國民も亦その適歸するところを知らない有様であつたため、明治大帝の大御心より出でたこのことである。

此の勅語發布記念日に當り我らの思出づることは今より四十年前日本全國の大問題となつた内村鑑三先生の所謂『御眞影事件』であつた。丁度教育勅語發布の日全國の學校に於て之を捧讀せられたが、東京の第一高等中學校に於て之が捧讀の際突然意外なる事件が生じ、全國に喧傳せられ、教育勅語發布の意義が重要であつただけ、それだけ此の事件は我國未曾有の最大不敬でありとせられ

基督教は我が國體に反するこの思想が津々浦々にまで宣傳せられたのである。

事件は當時何人も知らない者はない程有名であつた。然し乍らそれが有名なだけ、事實は誤傳せられ甚しく曲解せられたのである。事實はこうである。當時第一高等中學校（今の第一高等學校）に於て教育勅語を捧讀後、久原教頭が『こゝに我が校に下賜になつた此の勅語には天皇陛下の御名が御親筆で認められて居るから、教官は一人づつその前に出て之に「禮拜」せよ』と命じた。そして教師一同謹んでその命に従つた。然るにその末席にアメリカ歸へりの一人の年若き教師が居た。彼は米國留學中須臾も故國の事を忘るゝ暇なく、如何に國のため又君のため一身を捧げて之に盡くさんかご心を碎いた者であつた。恐らくは其の當時全校中彼程の忠君愛國者はなかつたであらう。彼は其の頃カーライル著クロムウエル傳を讀みつ

ゝあつた。そして自らクロムウエルのやうに誠實であり、彼の如く國のために盡し度く思つて居たのである。カーライルの熱筆、クロムウエルの至誠、燃々として彼の胸中に燃えて居た時であつた。彼は教頭が勅語の中に在る御親筆に『禮拜せよ』と言はれて、之はちとおかしいと思つた。そして一度之を訊したところ、『余は禮拜とは崇拜の意にあらずして敬禮の意なる事を木下校長より聞きしにより喜んで之をなせしなり』。事實は之だけであつた。勅語捧讀式は無事終つた。

然るに式後教師のうちから『内村は大不敬漢だ。それはヤンだからだ。これをこの儘に不問にするわけにゆかない』と叫ぶ者が出て全校の大問題となり、次て全國に喧傳せられ、『内村は校長の前に傲然として斯かる偶像や文書に向ひて禮拜せずと言ひ放つた』とか、又『御眞影に對して敬禮をしなかつた』と誤傳されるに至つたのである。

私は其の當時の第一高等中學校の教師たりし人々に對し何等の恩怨もない。殊更に彼らの名譽を毀損して自ら快哉を叫ぶ者でもない。只少しく不當の迫害を受けた眞實の愛國者のため、又之がため不當の誤解を受け、眞に國を救ふべきものなるに反つて非國家的のものごせられた基督教の福音のために辯じ度いのである。何故勅語捧讀式後一高の教師は此の瑣細な事件を心小捧大にし、又事實其のものを曲歪して大問題を起すに至つたのであるか。それは此の事件は彼らの間には實に又と得難い反内村の鬱憤を晴す好機會であつたからである。

それはこうである。此の事件の少し前、彼らは全校の學生を引率して發火演習を行ひ、東京の郊外に一泊した事があつた。そして宿舍に於て互に猥談に耽り、男〇の手柄話をし合つた。不圖彼らは坐に先生の居ないことに氣付き、『内村はどうし

た』と叫んだ。先生は室の一隅に早くから床をこり、床上で芳賀博士と和歌について話合つて居られたが、此の時、『諸君の御話はこゝで謹聽して居ました』と言はれた。此の一言で一座は森として白け亘つたこの事である。彼らの國體擁護、基督教排撃の動機はこゝから出たものらしゝあつた。

此の『不敬事件』を全日本の大問題としたのは文學博士井上哲次郎氏であつた。博士は彼らの一人ではなかつた。それ故直接この事には關係がなかつた。博士は當時新歸朝者として泰西の新學問に造詣深く、然かも其の思想は我國在朝の大官と相合致して其の覺え芽出度く、其の寵を得ること厚かつた。此の博士は此の事件を材料として『教育と宗教の衝突』と云ふ一大論文を公表し、基督教は其の本質民主主義であつて、君主主義である我が國體と相容れない。故に之を信することは國家に害がある云ふ事を力説されたのである。之

がため我が國に於ては永く基督教は國體と相反するとの觀念が植付けられ、信者はヤソとして輕蔑せらるゝに至つた。今日尙軍隊や小學校に於て又國粹主義者の間に於て此の偏見の殘存を見る。

此の騒のため先生は職を失はれ、衣食に窮せられたことは勿論、日々無知なる者から脅迫狀が舞ひ込み、様々の苦難を受けられた。古來眞の愛國者はかくの如き迫害を受けるのである。實に我國民は基督教の純福音が當に國體に反せざるのみならず、反つて國礎を堅うするものなるを知らず、之を拒否し、排斥して今日に至つたのである。今勅語發布四十年記念の式の舉行せられた年、先生は此の世を去られて、先生より親しく當時の感想を聞くことを得ないことを甚だ遺憾に思ふのである。先生若し在世ならば感慨無量のものがあるに相違あるまい。

一、教育勅語と基督教

教育勅語發布以來滿四十年、其の謄本に御親筆の陛下の御名を『禮拜』することを躊躇した者を不敬漢とした我國の指導者たちは、果して此の勅語の御精神を自ら實踐躬行し來り、又之を我が國民に徹底せしめ得たであらうか。我が國民は今日果して善く明治大帝の宣明し給ふた我が國の建國の精神に従つて歩んで居るであらうか。

陛下の臣民は克く忠に克く孝であるか。兄弟に友に、夫婦相和し、朋友相信じ、恭儉己を持し、博愛衆に及ぼして居るか。彼等は果して公益を廣めつゝあるか。若し夫れ一段緩急あらば一身を獻げて義勇奉公の念旺盛であるか。今日國を憂ふ者は、世道人心緊張を失ひ、朝憲は度々紊亂されんとし、風規は益々頽廢しつゝある事を目撃して長嘆息をして居るではないか。東よりの黄金の誘惑、

北よりの赤旗の争擾に誰か心ある者は我が國の徳教の根源、その國體の精華が次第に衰退し、脅威せられつゝあるを思はない者があるか。

教育勅語發布以來、我國は三大戰役を経て一躍世界の第一流國となり、三大海軍國の一となり、國運の隆昌、文化の増進、産業の發達、眞に目ざましいものがある。そして樂觀的預言者は此の顯著なる進運に眩惑され、民心の奥底に潜んで、醜醜醜醸しつゝある禍惡の根源を洞察せず、平康らざるに平康平康と云つて居るのである(エレミヤ記六・一四)。果して我國は今後も亦明治大正時代の進運を繼續し得られるであろうか。嘗て父祖が辛苦して築き上げた道德的遺産は今や殆ど倒盡して、何をも残さざるに至りつゝある。何れの國、何れの家、何人と雖も、父祖の功績、その遺産に永久に依存することは出来ない、新時代の創造は必らず現代に生くる者のうちから發しなければならぬ。

果して現代の日本人に此の大理想、大創造力があるか。私は聞き度い、現代の日本人に前途どれだけの大希望があるかを。

濱口總理大臣は記念式に祝辭を述べて言ふ。

憲法制定の精神は教育勅語に示されたるどころその本源を同じうせらるゝものであると拜察する次第であります。随つて我が國の憲法は國民道德と相表裏して始めてその美をなすことが出来ること申さねばなりません……然るに憲法實施以來既に四十年、固より相當の成績を擧げたことはこれを認むるのでありますが、當初の御期待に副ひ奉らんとするには、我々國民は今後一層教育勅語の精神を徹底的に服膺實行することに努力し、以て國民道德の進歩を促し、かくの如くして我が國憲政有終の美を濟すことに精進しなければならぬと思ひます。

『教育勅語の精神を徹底的に服膺實行する』力

は何處より來るか。これが最大關心事であらねばならない。總理大臣は之を説かない。大臣は只近時の世相を憂ふ。第一は不健全なる文藝である。

近時に於ける世相を視まするに、不健全なる文藝が漸く青年男女の間に浸潤し、享樂に耽溺する風都鄙に瀾漫せんとする傾向あり、

總理大臣の憂慮する世相の第二は所謂危険思想の波及である。

又世界大戰前後より歐洲の社會において漸く旺盛となりました危険矯激なる思想が我國に波及し……動もすれば……國體觀念に反するが如き思想を抱く者を生ずるに至つたことはまことに憂慮に堪えざる所であります

これらの原因を究めて帝國の首相は云ふ

今日我國が直面する所の國民經濟上の難局は：

・國民が奢侈贅澤に流れ、勤儉力行の美風を失ひたる結果に因ることもまた少くないと思ひま

す。又思想上の難局は：國民精神の内にこれに誘惑せらるだけの間隙のあることも又その大なる原因であります。

近來は民心一般にし緩して國民精神の緊張を失ひたるの感なきを得ないのであります。これ即ち經濟及び思想上幾多の難問題を惹起するに至りたる一大原因でありまして、誠に寒心に堪へざる次第であります。

然らば『かゝる世相に對しては速にこれが匡救の道を講ずることが國家の爲に眞に喫緊事なりと思ふ』帝國首相の之が匡救の道は何であるか。

今上陛下御踐祚の……勅語に『模擬ヲ戒メ創造ヲ勗メ』と仰せられましたことは國民の夙夜服膺して寸時も忘るゝことの出来ない大訓と存じます。

總理大臣の祝辭は之で終つて仕舞つた。如何にして勅語の精神を實行し得るか、如何にして不健

全なる文藝を排し、又國體の精華を明にし得るか、又遲緩したる民心を緊張せしめ、國民精神を高め、創造力を昂め得るか。此の解決を與へざる限り總理大臣は只國の前途を憂ひて之がために泣くのみである。噫、我が國民は何處にか興國の大精神を得んとする。何處に往かばその大希望に燃ゆる事を得るか。之を帝國總理大臣に聞き得べくもない。

まことに『造家者の棄てたる石は、これぞ隅の首石おひしとなれり』である（ルカ傳二〇・一七）。實に此の興國の礎こそは我が國民が非國家的とし、我が國體に反する者として之を排斥した基督教の福音に在る。教育勅語の上の御親筆を『禮拜』しなかつた故に國賊とし、全國の人々立つて之を迫害した内村先生の先覺はこゝに在つたのである。私は先生の書かれた古い『文學博士井上哲次郎君に呈する公開狀』より左の文章を掲げる。

足下の、基督教徒が我國に對し不忠にして、勅

語に對して不敬なるを證明せんとするや、該教徒が儀式上足下の註文に従はざるを以てせられたり。然れども茲に儀式に勝る敬禮の存するあり。即ち勅語の實行是なり。勅語に向ひて低頭せざるを勅語を實行せざるを不敬孰れか大なる。我賢明なる 天皇陛下は儀式上の拜戴に勝りて實行上の拜戴を嘉みし給ふは余が萬々信じて疑はざる所なり。

畏れ多くも我 天皇陛下が勅語を下し賜はりし深意を推察するに、 天皇陛下は我等臣民に對し、これを禮拜せよとて賜はりしにあらざして、之を服膺し、即ち實行せよとの御意なりしや疑ふべからず。而して足下の哲學的公平なる眼光は、余輩基督教徒を以て佛教徒よりも、儒者、神道家、無宗教家よりも、我國一般公衆よりも、勅語の深意に戻り、國に忠ならず（實行上）兄弟に友ならず、父母に孝ならず……

なすか。不忠不孝不信不悌不和不遜は基督教徒の特徴とせす。

足下は余が勅語を禮拜せざるが故に余を以て日本國に對して不忠なるものとせり、然れども店頭御眞影を他の汚穢なる繪畫と共にひさぐものは如何。朝に御眞影に向ひて嚴肅なる禮拜を呈し乍ら、夕に野蠻風の宴會に列し……盃を把りて互に相談するや余輩聞くものをして嘔吐の感を生せしむるものあるは未だ足下の耳にも目にも留まらざるや（中略）

勅語發布以來我國教育上の成績は如何なるものありや。日本國の教育社會は勅語發布以來その不敬者を責むるに喧噪なる割合に道德上の進歩ありしや。學生の勤勉恭謙は、發布以前に比較して今日著しき進歩ありしや。教員の眞摯儉節、その學生に對する愛情、犠牲の精神は前日に比して幾何の進歩がある。……學生が教師に

對する不平、教師が學生に對する不信切、理事者の不仕未等余輩の耳朶に達する反勅語的事實何ぞ斯の如く多きや。不敬事件よ、不敬事件よ、汝は第一高等中學校の倫理室に於てのみ演ぜられざるなり（以下略）

教育勅語に禮拜せざる故を以て基督教は國家に害ありとし、信者を國賊として排斥迫害した儀式的偽愛國者は此の重大なる一事を觀過したのである。『如何にして教育勅語の精神を實行し得るか』之である。而して此の實行に關して基督教の福音は最大原動力を供給するのである。然るに視よ、福音を排斥したる我が國民は、今勅語發布滿四十年の記念日に於て此の缺陷に氣が付いて來たのである。祝節日に各學校に於て勅語を捧讀せられ、學生が只之を聽くだけでは學校騒動はやまない。否最近文部大臣は私立大學總長と相會し、學生の騒動中は勞働者のストライキよりも下劣なるもの

がある事を嘆じて居るではないか。各町各村に於て之を讀みきかすだけで議員選舉の腐敗はやまな
い。一國の立法院より各町各村の議會に至るまで驚くべき收賄の事實はなくならない。エロチツクの文學に耽溺する事をやめて質實剛健の氣風は興らない。喧噪と憎惡とのストライキと資本家の苛酷なる搾取とは一掃されない。國民全體に浸潤した物質慾、そのためには如何なる不正不義をも敢て行ふ道德の頹廢は防止出来ない。米國の黄金と、露國の暴力との崇拜は廢らない。彼等の愛國は精要路の大官を暗殺せんとする位である。我國を救済するものは實にキリスト・イエスを信する信仰以外にないのである。教會ではない。さりごとく只主義としての無教會でもない。キリストを信じ、そのうちに在る永遠の生命に與りて始めて全人類を包容する大理想は輝き、世界歴史に貢獻する創造力は我が内に生ずるのである（以下次號）。

柏 木 通 信

齋藤宗次郎

恩師内村先生の死は、其生涯の事業より見るも、其果されし天職の性質より見るも、人類歴史上特筆すべき一大事實たるは論を俟たない。先生の地上生活は一の遺憾もなく閉ぢられたが、隱密の間に靜かに成し遂げられし宗教改革の大業は、これより漸次意外の所に其生活の進展發露を見、主の日を迎ふる準備として、人類は無上の福祉を蒙ることゝなるに相違ない。

聖書之研究の廢刊に火の消えし感を懷き、内村聖書研究會の解散に家を失へし思ひを持ちし者あるも、そは人情の表面に起る暫時の現象であつて、夙に選ばれて福音に生き、イエスに隸屬する信者にあつては、如何なる境遇を行くにしても、遂には主の備へ給ふ榮光の里へと集めらるゝのである。一たび恩師の許に導かれ、靈的の關係に預りて、特殊の恩惠使命を負ふに至りし教友等の歩みは、

時の推移に従つて如何に向ふことであらうか、其消息を知つて互に同情し且つ祈るは、主に在りて持つ所の愛を結ぶ所以である。

四月六日(日)午前十時内村聖書研究會解散式を舉行した。會する者三百四十二名。之は誠に當然のことで、又大に賀すべき事である。先生は既に萬事に解決を告げて逝かれた以上、之を其儘に存續すべき理由は一つもない。六百の會員に取りても、今や新たな責任と共に、信仰生活上の一大好機を與へられたのである。解散と同時に名稱は消えた。然し永久に消えざるは堅く植ゑ付けられし獨立の信仰である。各自に賦與せられし單一の信仰は、愛の鞭試験の火を潜つて益々生命力を加へ、夫々使命のある所に直進することゝなつた。當時藤本武平二氏を以て發せられし注意は當を得たるものであつた。即ち多年内村先生から獨立の信仰を學びし諸君は、今後の行動に於て全く自由である。畔上塚本の兩先生其他諸先輩の集會に行くも可。曾て關係せる教會に歸つて之を助くるも

可。新たに集會を開くも、直接傳道に身を獻ぐるも悉く可なり。要は何處に在りても、堅き信仰に立ち愛の實行に出づるにありと。此に於て一同は各の先途に就て眞劍の祈を爲し、漸次夫々導かるゝ所に向つて去就を決したのである。爾うして其一部の兄弟姉妹等は、恩師を用ひて現はし給ひし神の鴻大の恩寵を感謝讚美し、又更に先生の遺業、親愛なる教友、祖國日本、人類同胞の爲に、聖靈の降臨を祈らんとて、互の愛を以て柏木の講堂に集ることゝなつた。

斯くて其第一回感謝祈禱會は四月十三日に開かれた。其處には素より見ゆる所の指導者教師も法文も規約も儀式もなく、我等の救主イエス・キリストは中心となり又凡てとなり給ふた。現代の日本、此現代日本に於て、斯くも顯著なる聖業の出現を面の當り觀且つ味ひし私は、何の言葉を以て感謝すべきかを知らなかつた。此處に深く秘め給ふ恵ご力ごは、何れの日にか必ず闡明せらるゝ時はあるであらう。

然るに越えて五月十一日、我等は突然新しき發表に接した。石原聖書研究會の開會はそれであつた。我等は石原兵永氏の熾烈なる意氣を認め、純眞なる趣旨精神を聞いて喜んだ。同氏が福音の恵みに感激し、聖書に示さるゝ神意を、同志と共に靜かに然も奥深く探らんとする心は、何物も之を妨ぐることは出来ない。ルカの穿ちし坑道より、眞理の鑛石は惜氣なく運び出された。之を拾ふ者の幸福は大であつた。寔に聖書の寶庫の無盡藏なることを感じた。安息日は七回巡つた。必要なる試験の一時期は畢つた。同氏は本會の發生存在の目的を貫徹する爲に會場の變更を必要とした。切なる祈の結果氏の自宅を示されて、秋風訪づる、九月の半ばより同所に於て集會を續くることゝなつた。神に隨順する所には只感謝と満足とあるのみである。

翻つて我が祈禱會は、石原氏の研究會を見るに及んで三回の休會となつた。獨立人の使命と活動とは萬人萬様である。愛の御手に護られ祈りつゝ

旅し行く兄弟に對して、衷心の敬愛を寄するは、救はれし者の自然の流露である。既に哺乳期の過ぎ去りしを自覺し、聽くに優りて祈りたい、學ぶに勝つて愛したいと冀ふ兄弟等は、期せずして再び集ることゝなつた。六月八日は其復活せる有志祈禱會の開かれし日であつた。嚴肅と自由と和氣の横溢せる集會であつた。主は此小にして大なる集會を何日まで保ち給ふであらうか。然り主キリストの教會は天上まで永遠に續くのである。

それより日を経るに従ひ、恩師の全集刊行の爲にも、地方に點在する教友會との連絡の爲にも、其他純福音の傳道の爲に、種々なる方面に一部の役目を負はせらるゝ傾向のあるを示さるゝと共に、其務めを盡すに便宜なりとして、最も適當せる柏木教友會の名稱をさへ賜はるに至つた。何たる幸福何たる感謝ぞや。往け主と偕に。假令狭くとも自由漲る攝理の道を。四月以來絶えず蒙りし恩恵の跡と、今より受けんとする事實の報道とは號を追ふて掲ぐることになるであらう。

編輯餘録 主筆

○改題下新装して世に出た本誌年來の主張は巻頭に之を掲げた。此の主張の下に先般柏木教友會と協力しその寄稿を本誌に連載することを承諾した。本誌は本誌の精神を理解されキリストの純福音のために働く人は何人とも之を協力することを辭しない。柏木教友會の設立の趣旨は内村先生の臨終まで診療に當られ、先生より種々後事について語られた醫學博士藤本武平二君の筆によつて十分に理解せられ、又内村聖書研究會解散後の情況は今後連載される齋藤宗次郎氏の柏木通信によつて知られるであらう。同氏は過去幾多の名譽ある越歴を有せられる信仰の鍊達の上である。本誌主筆は雜誌所載全體について責任を分担する。但しごんな人でも意見全部一致はあり得ないであらう。

○本誌は内村先生に關する記事が大牛を占めた。私は、十數年不幸にして先生の講筵に出でず。先生を訪ね又先生の御訪問を受けて親しくその深い靈的經驗について聞くことも少なかつた。それだけ又先生の性癖にまでも感化されることも少なかつたかも知れない。今後靜かに世界に對して代表的現代日本人である斯人の精神、信仰、學問をその著書について研究し聖書の研究の外之をも本誌に載せ度く思ふ。

○『ごんな事があつても一年は是非續け給へ

やめてはいけないよ』と本誌發行の相談に上つた時内村先生は私に言はれた。爾來三年を経過した。其の間精神的に又物質的に本誌を獎勵して下さつた先生の高恩は忘るべくもない。又創刊以來毎月百部(最近私より御願して七十部)を購ひ知人の間に配布して本誌を援助せられる田中良雄君の深厚なる友情に心から感謝する。此二人微り合は本誌の今日あるを得ない。其の他山本河合河井落合其の他、濱田君に深謝する。田村次郎君は無報酬で最初から發送其の他の事務一切を執り、横尾夫人は包紙の宛名を書いて本誌を援助されて居る其等の厚意に對し深く感謝する。又本誌の題字は新潟高等學校教授坂部重壽氏の揮毫である。我ら爰に記して感謝の意を表する者である。

○本誌諸般の事務整理の便宜上改題を機として發行所を田村次郎君の宅に移した。然し今後も轉居其の他の社用書信を主筆宛に送られて少しも差支ないのみか、反つて早く用を辨ずることもあり得ると思ふ。

○内村先生の聖書の研究誌が産んだ聖書雜誌は私の手許にあるもので既に十種に近い。今後更に増加するかも知れない。本誌讀者は多分其の全部を讀まれ居ないであらう。それ故本誌は今後餘白ある時はそこに載せられた有益な研究所説を紹介して直接その雜誌を讀まれるやう勤め度く思つてゐる。又本誌は聖書

之の研究誌が産んだ各地の聖書研究會に對して深甚の興味を有し、其の狀況を知り度く思ふ者である。

○私の親友は殆ど皆本誌讀者である。それ故近來私の友人名簿は全く不用に歸し、本誌讀者名簿がそれに代つた。私には讀者の方々が一番親しく感ずる。丁度ラザロを放送する者が其の心に應取者一人一人を畫いて居るやうに、私は筆を執るとき其の一人一人のことを思ふ、近年私は年賀狀を省略して居るは形式的である謹賀新年よりも本誌を以て友に語り得る便があるからである。賀狀省略乞諒承

本誌の發賣所を

左記に依頼しました

基督教書類、雜誌、聖書讚美歌
其他一般圖書類

特に内村先生著書、高弟諸先生の雜誌
取次

東京市外淀橋柏木九四六

獨 立 堂 書 房

振替東京一九四六八番

内村鑑三先生記念出版

洪水以前記 定價七〇 送料四

創世記初め七章の獨創的研究、現代科學と聖書の啓示との關係につき暗示に富む。

英余は如何基督信徒となす乎 定價一、〇〇 送料四

世界的名著獨、瑞典、丁抹、其他の國語に譯せられ、日本人の眞價を高む。

復活と來世 定價六〇 送料六

基督教の來世觀を明にし、愛する者を失ひ悲痛に憫む者に慰安と光明とを與ふ。

歡喜と希望 定價三〇 送料二

自然と人生とに對する美はしき心境の表現にして多くの人々に愛讀せらる。

モーセの十誡 定價上製八〇 送料四

基督教道徳の根源を明かにし、現代の個人及び社會生活につき教ゆるところ深し

以上先生逝去のため記念として其の壯年時代の寫眞を挿入して出版す。

東京市外淀橋柏木九一九

發行所 聖書研究社

取次 聖書之眞理社

振替東京六三三七五番

藤井武全集豫約出版廣告

刊行の辭

預言者はその故郷に於て尊ばれない。藤井武君も亦武蔵野の一角に立ちて叫ぶこと十年、遂に國人は彼に耳をかまなかつた(中略)。神を絶對に義とした彼は叫んだ、神に打ち据ゑられよ。神に絶對に信賴したる彼は歩んだ、全く打算なき生活を。眞實は彼の生命、孤獨は彼の糧。純潔は彼の生活、希望は彼の歌。エレミヤがケンテを愛したる彼の革囊には、國を愛してしかも國に愛せられざる預言者の涙が満された。彼は數年前彼の妻の天國に召されし後、彼の生活は此世に屬ける者の歩みではなかつた。彼は來世の希望に生きた。彼の研究思索詩歌感想はかくの如き生活を以てする聖書眞理の表現に外ならない。獨創清新の香氣百合の花の如し。一言一句斬らば生命が迸り出づるであらう(以下略)。

編輯及刊行責任者 塚本虎二 矢内原忠雄

全十二卷 四六判九ボ 總クローズ函入 一卷約五五(頁) 一部賣せず

刊行期日 昭和六年二月中旬 第一回配本。爾後毎月一卷刊行

申込方法 申込金不要、申込期限迄に第一回會費二圓五十錢及送本料添付申込のこ

會費 (一) 毎月拂 貳圓五拾錢 送本料 市内六錢 内地十八錢

(二) 一時拂 貳拾八圓五拾錢 送本料 市内七十二錢 内地二圓十六錢

拂込方法 毎月五日迄に着金するやう御拂込を乞ふ。着金順に配本

豫約申込期限 昭和六年一月三十一日

東京市外大森八景坂上 矢内原方

藤井武全集刊行會

振替東京三九九七九番

右全集を本誌讀者諸君に推薦す。便宜聖書の眞理社に申込まれば喜んで御取次して差上げます(江原)

(昭和三年十二月六日) 等三種郵便物認可

聖書之眞理

第三十九號

昭和六年一月一日發行 (毎月一回一日發行)

定價二十錢